

The Creative Writing Process of Taro Tominaga's Poems Unpublished within His Lifetime (2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉浦, 静 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6016

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



富永太郎生前未発表詩篇の生成過程（2）

杉 浦 静

14 警戒

1 草稿1

《草稿番号》 40134

《用紙》 洋紙 1枚

本紙葉には、縦二つ折り、横三つ折りの折り跡がある。

《筆記具》 ペン・ブルーブラックインク

《校異》

警戒

C.M.に

酔ひ痴れて、母君の知り給はぬ女の胸にあるとき、「ここにわが働かざりし「腕↓双手」あり」⁽¹⁾の句を君の耳もとにさゝやき、卒然と君の眼の中に、母君の白き髪と額の皺とを呼び入れるものは何であるか。心せよ、これこそ、世界の構成の最下層から突き出で、君の心臓の内壁にまで達する、かのへらへらとした気味あしき触手の、節奏なき運動の効果なのである。「しかもそのために↓削除」人はこの触手

富永太郎生前未発表詩篇の生成過程（2）

の存在に気付くことがあまりに少なく、しかもそのために「ちよろりとやられてしまふ」ことがあまりに多いのである。されば友よ、（君は尊敬すべき生活の殉教者だ）、まづ空間を横ぎるこれらの黒い線条の存在に注意しやう。そして、卑しむに堪へたるかれらの機能に対して、心からの敵意を以て警戒しやうではないか。

Mai 1923.

(1) Voici mes mains qui n'ont pas travaillé

— Verlaine, Sagesse, II, 1.

2 草稿2

《草稿番号》 40133

《用紙》 「東京 文房堂製」 「10×25」 原稿用紙（25字×20行） 1枚

《筆記具》 ペン・ブルーブラックインク

《校異》

警戒

C.M.に

酔ひ痴れて、母君の知り給はぬ女の胸にあるとき、「ここにわが働かざりし双手あり」の句を君の耳もとにさゝやき、卒然と君の眼の中に、母君の白き髪と額の皺とを呼び入れるものは何であるか。心せよ、これこそ、世界の構成の最下層から突き出でて、君の心臓の内壁にまで達する、かのへらへらとした気味あしき触手の、「律↓削除」節奏なき運動の効果なのである。人はこの触手の存在に気付くことがあまりに少なく、しかもそのために「ちよろりとやられてしまふ」ことがあまりに多いのである。されば友よ、(君は尊敬すべき生活の殉教者だ)、まづ空間を横ぎるこれらの黒い線条の存在に注意し「や↓よ」う。そして、卑しむに堪へたるこれらの機能に対して、心からの敵意を以て警戒し「や↓よ」うではないか。

Mai. 1923.

15 忠告

1 草稿1

《草稿番号》 40136

《用紙》 洋紙 1枚

本紙葉には、縦二つ折り、横三つ折りの折り跡がある。

《筆記具》 ペン・ブルーブラックインク

《校異》

忠告

思想の重圧のために眠りがたい軀には、起つてロコ、風の肘掛椅子に腰を下す必要がある。そして膝を組んで、壁の薄浮彫のあはいニュアンスを眺めながら、細巻のシガレットを一本ふかすうちには、

どんな「ナシ↓重苦しい」思想の悪夢でも退散させることが出来るものである。

然し、もしあなたが「を↓削除」がたを庄し付けて眼を妨げるものが鈍重な「思想」ではなくて、あの悪意にみちた「悔恨」であつた夜は——あなたがたが道徳家でないならば、きつとこんな夜を知つておいでせう。なぜならば、非道徳家は悔恨を懐柔すべき何等の道徳をも持ち合せないから——どうしたらよいであらうか。そのときは、残念ながら夜明けを待つほかはないのです。能のない顔をした昼が来て、「退屈」といふ魔酔剤をこの世のもののすべての上に撒きちらすまで待つほかはないのです。たとひ眠りがたい夜が、床の上に転輾する身にとつて、いかほど長く感ぜられやうとも。

あなたのテーブルの上にある瓶は、あれはコニャックですか。あゝ、それはよした方がいゝです。それは第一あなたの健康に害があるし、おまけに昼が持つて来てくれる魔酔剤の効果を奪つて、あなたの肉体を嘔む悔恨を翌日まで引き延すに役立つだけのものですから。

Mai. 1923.

《注》 15行目「瓶」は、「曇+瓦」の字体で書かれたものを校訂した。

2 草稿2

《草稿番号》 40136

《用紙》 「東京 文房堂製」「10+25」原稿用紙(25字×20行) 2枚

《筆記具》

《校異》 ペン・ブルーブラックインク

忠告

思想の重圧のために眠りがたい軀には、起つてロココ風の肘掛椅子

子に腰を下ろすことが必要である。そして膝を組んで、壁の薄浮彫の淡いニュアンスを眺めながら、細巻のシガレットを一本ふかすうちには、どんな重苦しい思想の悪夢でも退散させることができるものである。

しかし、もしあなたがたを押し付けて眠を妨げるものが鈍重な「思想」ではなくて、あの悪意にみちた「悔恨」であつた夜は——あなたがたが道徳家でないならば、きつとこんな夜を知つておいででせう。なぜならば、非道徳家は悔恨を懐柔すべき何らの道徳をも持ち合せないから——どうしたらよいであらうか。そのときは残念ながら夜明けを待つほかはないのです。能のない顔をした昼が来て、「退屈」といふ魔酔剤をこの世の物「〔す〕↓す」べての上に撒き散らすまで待つほかはないのです。たとひ眠りがたい夜が、床の「〔う〕↓上」に転輾する身にとつて、いかほど長く感ぜられやうとも。

あなたのテーブルの上にある瓶は、あれはコニャックですか。あゝ、それはよしの方がいゝです。「第一↓削除」それは第一あなたの健康に害があるし、おまけに昼が持つて来てくれる魔酔剤「て↓の」効果を奪つて、あなたの肉体を嘔む悔恨を翌日まで引き延すに役立つだけのものですから。

Mai. 1923.

《注》 15行目「瓶」は、「曇+瓦」の字体で書かれたものを校訂した。

16 美しき敵

1 草稿 1

《草稿番号》 40137

《用紙》「東京 文房堂製」「10-25」原稿用紙(25字×20行) 3枚

《筆記具》ペン・黒インク(題名のみブルーブラックインク)

富永太郎生前未発表詩篇の生成過程(2)

《校異》

美しき敵

私はその頃不眠症に悩んで「居↓る」た。かなり多くの人々が私の病氣を知つてしまつて、それに対する忠告を与へてくれる人も少くなかつた。

「或る↓気軽」な或る「会社員↓大学生」は言つた。運動が足りないんだ「よ↓ね」。君みたい一日「ナシ↓中」室の中に居て煙草を吸つてゐる男に安眠の出来るわけはないさ。ちつと「会社↓学校」のコートへやつて来たまへ、「休昼↓昼休」みにお對手しやう。」

肥満した或る「大学↓若い」会社員は言つた。「君、誰か見付けて早速結婚したまへ。すぐ癒るよ。君みたいな男がその「歳↓齢」になるまで独身で居るなんてわるいことだ。」

その外まだ数多くあつたが、私は今それらを列挙「して↓する」「居↓煩」に堪へない。勿論忘れてしまつたものもある。

私はそれらの親切な忠告「【な↓に】」対して↓削除」の何れにも反対しはしなかつた。といふのは、睡眠不足の為に著しく明晰を缺いて居た私の頭には、それらの「ナシ↓どの」忠告の根拠も、皆私の症状の中に見出されるやうに感ぜられたからである。「然し、↓それにも拘らず」私の従つた忠告は、結局一つもなかつた。恐らく此の「【地(書きかけ)】↓削除」怖るべき病氣が、その徴候の一つとして、私の意志を根こそぎ奪ひ去つてしまつた為「【だつた↓なので】」あらう。いや真実を言ふと、これらの忠告は、それが与へられ「【た次の瞬間には↓てから暫く経つと、↓た次の瞬間には、】」私にとつて実に「【下↓くだ】」らなく、「馬鹿【ナシ↓タタ】」↓ばかばか「【しへ、【見え↓見えて【ナシ】、来て、↓削除】」たゞそれらの忠告者に対する私の軽蔑の念を強めるに役立つにすぎなかつたのだ。

一日、耐へがたく長い時間を消すために、私は私の「畏↓削除」敬

「ナシ↓愛」するマギステルを、かれのデューラー風の書斎に訪ふた。かれ「〔?〕、↓は、」久しく会はなかつた私の「健康について問ふたとき、↓顔を見ると」心から心配げに私「の↓が」健康を害してゐはしないかと尋ねた。「かれの↓削除」「そ↓こ」の白髪の老人の、子供らしい「無邪気さ↓真実」が、私をして今まで「ナシ↓に」ない「真↓削除」率「ナシ↓直」さで私の症状を「答へさ↓語ら」せた。「↓、」一体私は、私に向つて容態を問ふ人には、恰も私の病気が、他人に談つてしまふにはあまりに勿体ない、或る秘密な快楽であるかのやうに、異常な巧妙さでその真相を對手「の↓か」ら蓋ひ隠「す↓削除」さなくしては居られない奇妙な習慣を造り上げてしまつて居たのだが。私の答を聞き終つた「かのマギステル↓この老神秘家」は、もの悲しげな色を「ナシ↓かれの」大き「ナシ↓な」眼鏡の奥にたゞよはせながら、「ナシ↓ゆつくりと」言つた。

「私はあなた「の（眠（書きかけ）↓を」苦しませて眠りを妨げるあ、ものを、形而上学的復讐の感情と呼んで居ます。夜は「ナシ↓すべての」現象の垣を取り払ふものです。そこであなたの巨大な敵が出現するのです」「↓。↓。↓」さうです。あなたの場合では、たしかに敵です。」

私はかれのテュートン民族的の氣質から生れる言説を聞かたびに、その思想のゴシック風の効果から快い圧迫を感じると同時に、その単純な壮重さ「を↓に」やゝ滑稽な感じを見出さ「ないわけに行かなかつた。↓ずには居られないのを常とした。」「ナシ↓（その故にこそ、私はこの老人を心から敬愛するのだ。）」このときもまたさうであつた。「（その故にこそ、私はこの老人を心から敬愛するのだ。）↓削除（前に移動）」然しこの日は、なほその上に、かれの言説の中に私が怖れを以て見出さなければならぬあるものがあつた「のだ。↓。↓」さうだ、夜毎「の↓に、」私の「大（?）↓心臓」を、「燃え立たせ↓削除」私自身の肉体の組織を破壊するまでに燃え立たせる「ものが↓あの毒々しい感情が」復讐の感情でなくて何だらう。夜毎「ナシ↓に」私の大

脳に忍び入つて、私を「、↓削除」絶対に抗しがたい畏怖の下に圧しつける「も↓あのもの」の「〔た〕↓が、」「（のきへんの書きかけ）↓削除」私の敵でなくて何だらう。しかも、あゝ！あまりに無感覚な、男性的の興奮を知らぬ、「敵である。↓燐のやうに冷たい、」薄暮の空のやうに「澄んだ↓深い、澄んだ」山間の湖のやうに↓深い「動かぬ↓深い↓削除」眼を有つた敵で「ある【。↓↓】↓はないか！」

「ナシ↓× × ×××」

これはよほど以前のことである。「ナシ↓」あの、私の敬愛するマギステルが死んでからも、もはや幾年経つたらう。「ナシ↓」そして今は——今もなほ、私は朝毎に、決して「書きかけ」↓勝」を得ることのない戦に疲れ果てゝ、ぶちのめされた犬のやうに床の上に横はる私自身を「ナシ↓太陽の光に照されて」見出すのである。

Jun 1923.

2 草稿2

《草稿番号》 40138

《用紙》 洋紙 1枚

本紙葉には、縦二つ折り、横三つ折りの折り跡がある。

《筆記具》 ペン・ブルーブラックインク

《校異》

美しき敵

私はその頃不眠症に悩んで居た。

かなり多くの人々が私の病氣を知つてしまつて、それに対する忠告を与へてくれる人も少くなかつた。

気軽な或る大学生は言つた。「運動が足りないんだね。君みたいに一日中室の中に居て煙草を吸つてる男に安眠の出来るわけはないさ。ちつと学校のコートへやつて来たまへ。」「休↓削除」昼休みにお対手

しやう。」

肥満した或る若い会社員は言つた。「君、誰か見付けて早速結婚したまへ。すぐ癒るよ。君みたいな男がその齡になるまで独身で居るなんてわるいことだ。」

その外、まだ数多くあつたが、私は今それらを列挙する煩に堪へない。勿論忘れてしまつたものもある。

私はそれらの親切な忠告のいづれにも反対しはしなかつた。といふのは、睡眠不足の為に著しく明晰を缺いて居た私の頭には、それらのどの忠告の根拠も、皆私の症状の中に見出されるやうに感ぜられたからである。それにも拘らず私の従つた忠告は、結局一つもなかつた。恐らくこの怖るべき病氣が、その徴候の一つとして、私の意志を根こそぎ奪ひ去つてしま「ナシ↓つ」たためなのであらう。いや真実を言ふと、これらの忠告は、それが与へられた次の瞬間には、私にとつて実にくだらなく、ばかばかしく、見えて、たゞそれらの忠告者に対する私の輕蔑の念を強めるに役立つにすぎなかつたのだ。

一日、耐へがたく「長」↓「永」い時間を消すために、私は私の敬愛するマギステルを、かれのデューラー風の書齋に訪ふた。かれは、久しく会はなかつた私の顔を見ると心から心配に私が健康を害して居はしないかと尋ねた。この白髪の老人の、子供らしい真実が、私をして今までにない「？」↓「削除」卒率直さで私の症状を答へさせた、一体私は、私に向つて容態を問ふ人には、恰も私の病氣が、他人に談つてしまふにはあまりに勿体ない、或る秘密な快樂であるかのやうに、異常な「巧」↓「削除」巧妙さでその真相を相手から蓋ひ隠さなくしては居られない奇妙な習慣を造り上げてしまつて居たのだが。

私の答を聞き終つたかのマギステルは、もの悲しげな色をかれの大きな眼鏡の奥にたゞよはせながら、ゆつくりと言つた。

「私はあなたを苦しませて眠を妨げるあのものを、形而上学的復讐の感情と呼んで居ます。夜はすべての現象の垣を取り払ふものです。そこであなたの巨大な敵が出現するのです——さうです。あなたの場

合では、たしかに敵です。」

私はかれのテュートン民族的の氣質から生れる言説を聞くたびに、その思想のゴティック風の效果から快い圧迫を感じると同時に、その單純な壮重さにやゝ滑稽な感じを見出「ナシ↓さ」ずには居られないのを常とした。「ナシ↓」その故にこそ、私はこの老人を心から敬愛するのだ」。このときもまたさうであつた。然し、この日は、なほその上に、かれの言説の中に私が怖れを「以」↓「削除」以て見出さなければならぬあるものがあつた。さうだ、夜毎に、私の心臓を、私自身の肉体の組織を破壊するまでに燃え立たせるあの毒々しい感情が復讐の感情でなくて何だらう。夜毎に私の大脳に忍び入つて、私を絶對に抗し「難」(書きかけ)↓「削除」がたい畏怖の下に圧しつけるものが、私の敵でなくて何だらう。しかも、あゝ！あまりに無感覺な、男性的の興奮を知らぬ、燐のやうに冷い、薄暮の空のやうに深い眼を有つた敵ではないか！

× × ×

これはよほど以前のことである。(あの、私の敬愛するマギステルが死んでからも、もはや幾年経たらう。)そして今は——今もなほ、私は朝毎に、決して勝を得ることのない戦に疲れ果て、ぶちのめされた犬のやうに床の上に横はる私自身を、太陽の光に照されて見出すのである。

Juin 1923.

17 俯瞰景

1 草稿 1

《草稿番号》 40139

《用紙》「東京 文房堂製」「10+25」原稿用紙(25字×20行) 1 枚

《筆記具》ペン・黒インク

《校異》

俯瞰景

溝^{とろ}ぶちの水たまりをへらへらと泳ぐ高貴な魄がある。かれの上、
「ナシ↓梅雨晴れの」輝かしい街衢の高みを過ぎ行くものは、脂粉の
顔、誇りかな香りを放つ髪、新鮮な麦藁帽子、気軽に光るネクタイピ
ン」↓……この魂にとつて、一日も「ナシ↓眺めるのを」飲むべ
からざる物らの世界である。「かれは↓削除」さて、かれは、これら
の物象の漸層の最下「低↓底」に身を落してゐる。軽装の青年紳士の、
黒檀のステツキの石突^{いしづき}と均しく位してゐる。しかも、かれは、この低
みから、すべての部分がかれの上^みに在るあの世界を「瞰^{みおろ}す↓みおろ
す」ことのできる、不思議な妖術を学び得た魂である——この屈從的
な魂は。

Juliet 1923.

18 癡狂院外景

1 草稿 1

《草稿番号》 40140

《用紙》「東京 文房堂製」「10↓25」原稿用紙（25字×20行） 2

枚

《筆記具》 ペン・黒インク

《校異》

癡狂院外景

夕暮の癡狂院は寂寞^{ひっそり}として
苔^{こけ}ばんだ石塀を囲らしてゐます。

中には誰も生きてはゐないのかもしれない。

看護人の白服が一つ

暗い玄関に吸ひ込まれました。

むかふの丘の櫟林の上に

赤い月が義理で上りました

（ごくありきたりの仕掛です）。

青い肩掛のお嬢さんが一人

坂を上つて来ます。

ほの白いあごを襟にうづめて、

唇の片端^{かたはし}が思ひ出し笑ひに振ちれてゐます。

——お嬢さん、行きずりのかたではありますが、
石女^{うますめ}らしいあなたの 眺^{まな}を

崇^{あが}めさせてはいたゞけませんか。

誇らしい石の台座から「（？）↓よ」ほど以前にずり落ちた
わたしの魂が跪いてさう申します。

——さて、坂を下りてどこへ行かうか……

やつぱり酒場か。

これも、何不足ないわたしの魂の申したことです。

Juliet 1923.

2 詩帖稿

《草稿番号》 40191-21

《用紙》 詩帖 I 41↓42頁

《筆記具》 鉛筆

《校異》

癡狂院外景

夕暮の癡狂院は寂寞として

苔ばんだ石塀を囲らしてゐます。

中には誰も生きてはゐないのかもしれない。

看護人の白服が一つ

暗い玄關に吸ひ込まれました。

むかふの丘の櫟林の上に

赤い月が義理で上りました

(ごくありきたりの仕掛です)。

青い肩掛のお嬢さんが一人

坂をあがつて来ます。

ほの白いあごを襟にうつめて、

唇の片端が思ひ出し笑ひに振られてゐます。

——お嬢さん、ゆきずりのかたではありませんが、

石女らしいあなたの 瞋を

崇めさせてはいただけませんか。

誇らしい石の台座からよほど以前にずり落ちた

わたしの魂が跪いてさう申します。

——さて、坂を下りて、どこへ行かうか……

やつぱり酒場か。

これも、何不足ないわたしの魂の申したことです。

Juliet 1923.

富永太郎生前未発表詩篇の生成過程(2)

19 原始林の縁辺に於ける探險者

1 詩帖稿

《草稿番号》 40191-33

《用紙》 詩帖 I 65、68頁(66、67頁は破棄)

《筆記具》 鉛筆

《校異》

○原始林の縁辺に於ける探險者 (une ode)

I

太陽の眼を知らぬ原始林の

幾日幾夜の旅の間、

わたくし熟練な未知境の探險者は

たゞ、ふかぶかと頭上に生ひ伏した闊葉の

思ひつめた吐息を聴いたのみだ。

たゞ、蹠に踏む湿潤な「苔」↓削除 苔類の

ひたむきな情「熱↓欲」を感じたのみだ。

……

「この旅の終りの日、

獣のやうな忘却の探検を導いた

恒にほの暗い第二の太陽も亡びやうとする日、

大森林の外「？」↓縁 近くさまよひ行つたが……↓削除

Ⅱ ↓削除

「原始林は黄金【色↓削除】の水蒸気【に飽満してゐた。↓の海であつた。】

原始林は一つの大きな堆肥の内部であつた。

そこには熱とエネルギーの無言の躁宴があつた。↓削除

[Prus subjectif]

Entre achauter eturaconters → 削除

《注》 詩帖 I 53 頁 1 行目から、鉛筆で「○原始林の辺縁に於ける探險者」の題名が書かれ、削除されている。この題名削除の後、同じく鉛筆で「煙草の歌」が書かれ、これもまた全文削除されている。

2 草稿

《草稿番号》 40141

《用紙》 「10 20 クジャク印原稿紙」 4 枚

《筆記具》 黒インク、ペン

《校異》

原始林の縁辺に於ける探險者

I

陽の眼を知らぬ原始林の
幾日幾夜の旅の間
わたくし 熟練な未知境の探險者は
たゞふかふかと頭上に生ひ伏した闊葉の
思ひつめた吐息を聴いたのみだ。
たゞ 蹠に踏む湿潤な苔類の
ひたむきな情慾を感じたのみだ。

II

まことに原始林は
光なき黄金の水蒸気に氾濫し
夏の日の大いなる「てへん？」 ↓ 削除 堆肥の内部さながらに

エネルギーの無言の「躁」 ↓ 大饗」宴であつた。
あゝ嘗て私の狂愚と慚「羞 ↓ 羞」とを照した太陽は
この探險の最初の日
さりげなく だが 赤々とその身を萎み
私をこの植物の大穹窿の中へと解き放つた。
その日から私に与へられたのは
獣類の眠りのやうな漆黒の忘却であつた……
それを思へば
今もなほ あゝ 喜びに身が慄ふ！

III

毛並さはやかな仔豹のやうに しづしづと
また軽捷に
私は「妖麗 ↓ 怪奇」な木賊族の夢を「ナシ ↓ 貪【慾 ↓ 婪】に」掻き分
けた――
何ものの悪意も知らず 怖れもなく
強靱な植物らの絶え間なく発汗する
強酒のやうな露を身に浴び
誇らかに たゞ誇らかに
鼻孔をひらき かぐろいエーテルを分けて進み行くわが身は
心楽しく闇と海とに裂傷をつくる
春の夜の無心の帆船であつた。

だが ときをりは
嘗て見た何かの外套のやうな
巨大な闊葉の披針形が
月光のやうに私の心臓に射し入つてゐたこともあつたが……

IV

恥らひを知らぬ^{にち}日々の燥宴のさなかにある日（呪はれた日）

私の暴戾な肉体は

大森林の暗黒の赤道を航過した「。↓！」

盲ひたる 酔ひしれたる一塊の肉 私の存在は

何ごともなかつたものゝやうに

やはり得々と 弾力に満ちて

さまざまの樹幹の膚の畏怖の中を

軽々と摺り抜けて進んで「ナシ↓は」行つたが、

しかし

喩へば肉身を喰む「〔？〕↓白」浪の咆「叫↓吼」を

砂丘のあなたに予感する旅人のやうに

心はひそやかな傷感に衝き入れ

何のためとも知らぬ身支度に

おのが外殻の硬度を「試↓削除」「ナシ↓駿」めす日もあつたのだ！

V

〔以下なし〕

20 手

1 詩帖稿1〔抹消稿〕

《草稿番号》 40191-42

《用紙》 詩帖I 86頁

《筆記具》 鉛筆

《校異》

手

おまへの手は「白く↓削除」もの悲しい「。↓、」

酒びたしのテーブルの上に。

おまへの手は息づいてゐる。

たつた一つ、私の前に。

おまへの手を風がわたる。

村の青虫を吹くやうに。

「私は疲れた、靴【？】↓は】破れた。↓削除」

《注》 最終形態成立後全体を大きな×印で削除している。

2 草稿

《草稿番号》 40142

《用紙》 「10↓20」原稿用紙 1枚

《筆記具》 黒インク、ペン

《校異》

手

おまへの手はもの悲しい、
たつた一つ、私の前に。

21 PANTOMIME

1 詩帖稿1〔抹消稿〕

《草稿番号》 40191-40

《用紙》 詩帖I 81頁

《筆記具》 鉛筆

《校異》

「 PANTOMIME

うす暗い椽側の端で
琥珀色した女の瞳が
光った——夫に叛いた。

【とり↓削除↓とり】残された哀れな共犯者が ↓（大きな×印で）
削除

「清潔な触手で追ひかける↓削除」

《注》 最終形態成立後、大きな×印で全体を削除している。

2 詩帖稿2

《草稿番号》 40191-40

《用紙》 詩帖Ⅰ 82頁

《筆記具》 鉛筆、ペン（黒インク）

《校異》

「○【交叉↓十字路】に於ける感覚↓削除」

「PANTOMIME → PANTOMIME（鉛筆書きの上を黒インクでなぞる）」

うす暗い椽側の端で
琥珀色した「女↓女（鉛筆書きの上を黒インクでなぞる）」の瞳が
光った——「夫↓夫（鉛筆書きの上を黒インクでなぞる）」に叛いた。

もうむかふへ向いた。

庭の木立と遊んでゐる——

「ナシ↓（黒インクで）あの狡猾なまなざしは」

「とり↓削除↓とり（のち黒インクで削除）↓とり（黒インクで）」「残された↓残された（黒インクで）」「哀れな↓哀れな（黒インクで）↓哀れな（？）」（黒インクで削除後）
共犯者が

清潔な触手で追ひかける。
だがみんな滑ってしまった。

女の冷たい「角膜の上を。↓角膜の上を。」

夫の眼がやつと「ナシ↓——するどく」追ひかけた。

「一【瞬】——だが鋭く。↓削除」

うす闇の中で「みんなが↓削除」

カチカチとぶつかる、

樹と夕焼と「眼と眼と、↓」「眼が、↓瞳と、」

瞳と「↓、↓…（黒インク）」瞳と「。↓…（黒インク）」

（完）（黒インク）

《注》 第一連から第四連まで、それぞれの連の上部に丸括弧が付され、それぞれ「3」「4」「4」「4」と記されている。各連の行数の表示か。

3 草稿1

《草稿番号》 40143

《用紙》 「20×20」原稿用紙 1枚

《筆記具》 黒インク、ペン

《校異》

PANTOMIME

うす暗い椽側の端で、

琥珀色した女の瞳が
光った——夫に叛いた。

もうむかふへ向いた、
庭の樹立と遊んでゐる——
あの狡猾なまなざしは。

とり残された共犯者が
清潔な触手で追ひかける。
だがみんな滑つてしまった、
女の冷い角膜の上を。

夫の眼がやつと、鋭く、追ひかけ「る↓た」。
薄闇の中でカチカチとぶつかる、
樹と、「ナシ↓□（「マスマキ」）夕焼と、「ナシ↓□（「マスマキ」）瞳
と、
瞳と……瞳と……。 （完）

Aout 1924

22 四行詩〔青鈍たおまへの声の森に〕

1 草稿 1

《草稿番号》 40145
《用紙》「〔東京 文房堂製〕」原稿用紙（セピア罫24×20）1枚
《筆記具》 黒インク、ペン
《校異》

四行詩

【青だみた↓青鈍た】【お↓□】おまへの声の森に
銅^{あかね}を浴びた 【この↓私の】額を【埋↓沈】めたい
柔かく 柔かく 毛細管よりも貞順に
【オーボアは↓オーボアは】胸を踏み 【ナシ↓□また□↓削除】睫毛
を媚殺する↓削除（全体に大きく×印を付けて）

【青鈍た おまへの声の森に
銅^{あかね}を浴びた この額を沈めたい
柔かく 柔かく 毛細管よりも貞順に
オーボアは胸を踏み 睫毛を媚殺する↓削除（全体に大きく×印を付けて）

【ナシ↓四行詩】
青鈍^{あそにび}たおまへの声の森に
銅^{あかね}を浴びたこの額を沈めたい
柔【か↓削除】く柔く 毛細管よりも貞順に
オーボア【は↓よ】胸を踏【み↓め】睫毛【を媚殺する↓に絶れ↓に
絶れ】

《注》 本紙葉には、三種の稿が書かれている。前の稿の成立後、後
ろに清書し、前の稿を抹消したと推定される。

2 草稿 2

《草稿番号》 40144
《用紙》「〔東京 文房堂製〕」原稿用紙（セピア罫24×20）1枚
《筆記具》 黒インク、ペン
《校異》

四行詩

青鈍^{あをにび}たおまへの声の森に
銅^{あかね}を浴びたこの額を沈めたい
柔く柔く 毛細管よりも貞順に
オーボアよ胸を踏め睫毛に縋れ

23 焦燥

1 詩帖稿1〔抹消稿〕

《草稿番号》 40192-17

《用紙》 詩帖Ⅱ 31頁

《筆記具》 黒インク、ペン

《校異》

母親は煎茶を煎じに行つた
枯れた葦の葉が短かいので。
ひかりが「ナシ↓掛布の皺を」打つたとき
寝台はあまりに「大きな↓金いろの」唸きであつた。

巾広い青葉を集め

棄てられた藁の熱を吸ひ

〔寝台の【求める↓削除】のど渴くわけを話↓削除〕

たちのぼる巷の中に「も知らない↓削除」

青黒い額の上に

寝台「が↓は」「が↓は」「求めるものを誰も知らない↓のど渴き」。

〔母親は煎茶を煎じに行つた。↓削除〕

求め「るものを知つてゐるか↓たのに求めたのに」

枯れた葦の葉が短かいので

母親は煎茶を煎じに行つた。

《注》 最終形態成立後全体に×印を付して抹消している。

2 草稿1

《草稿番号》 40146

《用紙》 「東京 文房堂製」原稿用紙（セピア罫24×20）1枚

《筆記具》 黒インク、ペン

《校異》

焦燥

母親は煎茶を煎じに行つた
枯れた葦の葉が短かいので。
ひかりが掛布の皺を打つたとき
寝台はあまりに金の唸きであつた
寝台は

「いぎたない↓いぎれたつ」犬の巣箱の罪をのり超え

大空の堅い眼の下に

幅ひろの青葉をあつめ

棄てられた藁の熱を吸ひ

たちのぼる巷の中に

青ぐろい額の上に

「ナシ↓むらがる蠅のうなりの中に」

寝台はのど渴き

求めたのに求めたのに

枯れた葦の葉が短かいので

母親は煎茶を煎じに行つた。

24 遺産分配書

1 詩帖稿1

《草稿番号》 40192-18

《用紙》 詩帖Ⅱ 32頁

《筆記具》 黒インク、ペン

《校異》

蠟燭を吹き消して寝返りを打てば、ああ、海の旗、陸の旗。
—人間は悩まないやうに造られてある。

2 草稿1

《草稿番号》 40147

《用紙》 「(東京 文房堂製)」原稿用紙(セピア罫24×20) 3枚

《筆記具》 黒インク、ペン

《校異》

遺産分配書

わが女王へ。決して「決して↓削除」穢れなかった私の魂よりも、
更に清浄な私の両眼の真珠を。おんみの不思議な夜宴の觴に投げ入れ
ようために。

善意ある港の朝の微風へ。昨夜の酒に濡れた「私の↓削除」柔かい
私の髪を。——蠟燭を消せば、海の旗、陸の旗。人間は悩まないやう
に造られてある。

わが友M***へ。君がしばしば快く客となつてくれた私の sabbat

富永太郎生前未発表詩篇の生成過程(2)

の洞穴の記念に、一本の蜥蜴の脚を、すなはち蠢く私の小指を。——
君の安らかならんことを。今日もまた、陽は倦怠の頂点を燃やす。

シェヘラザードへ。鳥肌よりもみじめな一夜分の私の歴史を。

S港の足蹠^{あしなへ}へ。私の両脚を。君の両腕を断つて、肩からこれを生や
したまへ。私の血は想像し得られる限り不純だから、もしそれが新月
の夜ならば、君は壁を攀ちて天に昇ることが出来る。

***嬢へ。私の悲しみを。

売笑婦T***へ。おまへがどれほど笑ひを愛する被造物であるか
を確かめるために、両乳房^{ちち}の間に蠟のやうな接吻を。

岩頭に立つて黄銅のホルンを吹く者へ。私の夢を。——紫の雨、螢
光する泥の大陸。——ギオロンは夜鳥の夢に花を咲かす。

母上へ。私の骸は、やつぱりあなたの「ナシ↓豚」小屋へ返す。幼
年時を被ふかずかずの抱擁^{だきしめ}の「一↓削除」「身↓削除」「に」↓削除」
沁み「ナシ↓入」るやうな記憶と共に。

「ナシ↓泡立つ」春へ。「パン。→pang」「ペン。→pang」

《注》 詩帖Ⅱ33頁に構想メモがある。筆記具は鉛筆。32頁の詩帖稿1
を書いた後に、記入。後に鉛筆で全行削除している。

遺言

女王へ——

朝風へ——

わが友M***へ——
S港の足蹠へ——
母親へ——
売笑婦T***へ——
母親へ——
〔親〕↓削除〕親愛なる

25 ランボオへ

1 断片稿 (AU RIMBAUD)

《草稿番号》 40148

《用紙》 便箋 (青野13行) 裏

《筆記具》 鉛筆

《校異》

Revoici le poète:
On ne fait que le droit.

3

Que Dieu le luise et le pose!
Qu'il ne voie pas ouvrir
les parasols bleues et rose
Parmi les flots, les martyrs!

《注》「[AU RIMBAUD)」は、初出の『富永太郎詩集』(家蔵版、昭和2年8月)収録の際、小林秀雄の記憶によって前半部が補われた。その経緯について、編者の村井康男は、

「遺産分配書」の後に「Au Rimbaud」がある。最後の作ではあるが、未定稿であり、且つ原稿の前半が消失して小

林秀雄君の記憶によって補ったものであるから、特にこれは巻末に附した。
と記している。

また、『富永太郎詩集』(筑摩書房版、昭和16年1月)の「後記」には富永次郎により、次の様に書かれている。

巻末の仏蘭西語で書かれた「Au Rimbaud」は兄の最後の詩である。原稿の前半が紛失してしまったのを、小林秀雄氏が記憶によって補ったもの、

小林秀雄の記憶によって補われた、前半の本文は次のとおり。

I

Kiosque au Rimbaud,
"Manila" à la main,
Le ciel est beau,
Eh! tout le sang est Pain.

II

Ne voici le poète,
Mille familles dans le même toit,

2 草稿1 (中原中也筆)

《草稿番号》 40150

《用紙》「東京 文房堂製」[10-20] 原稿用紙 1枚

《筆記具》 黒インク、ペン

《校異》

ランボ「ウ↓オ」へ

「↓Ⅰ」

キオスクにランボ「ウ↓オ」

手にはマニラ

空は美しい

えゝ、血は「皆↓みな」パンだ

「↓Ⅱ」

詩人がおいでになると

「千家族が一家で【?】↓軋」めく↓削除」掟に「かな↓【適↓摘】

つた事しかない

また「?」↓削除」お帰りにになると

千家族が一家で軋めく

「↓Ⅲ」

神様があれを横にして光られて下さる様に、

あれが青や赤のパラソルを見ない様に、

波の中は殉教者でうようよですよ

《注》 上部欄外に落書き・戯書。「Yamaguchi」「Tachaha」「富倉」

「第」などが散らし書きで繰り返し書かれている。

3 草稿2（中原中也筆）

《草稿番号》 40149

《用紙》「ATHENA（1）」原稿用紙（20×20）

《筆記具》 ペン、ブルーブラックインク

《校異》

富永太郎生前未発表詩篇の生成過程（2）

ランボオへ（未定稿）

富永太郎「作↓削除」

1.

キオスクにランボオ

手にはマニラ

空は美しい

えゝ血はみなパンだ

2.

詩人が御不在になると

千家族が一家で軋めく

またおいでになると

掟に^{オキテ}適ったことしかない

3.

神様があいつを光らして、横にして下さるやうに！

それからあれが青や薔薇色の

パラソルを見ないやうに！

波の中は殉教者でうようよですよ」↓削除」

《注》 草稿右欄外に、次の様にある。中原中也の付記である。

これは最初仏語「〔?〕↓削除」で書かれたものです。そ

れは富永君の床のまはりの何処かにあることだと思はれます。

今年七月末頃の作で、そして最後の詩です。

本稿が、『富永太郎詩集』（家蔵版、昭和2年8月）に収録さ

れた際、編者の村井康男により次の付記がなされた。

同訳「ランボオへ」は、中原中也君の写しによつたもので

ある。

また、『富永太郎詩集』（筑摩書房版、昭和16年1月）の「後記」

には富永次郎により、次の様に書かれている。

巻末の仏蘭西語で書かれた「Au Rimbaud」は兄の最後の

詩である。原稿の前半が紛失してしまったのを、小林秀雄氏が記憶によつて補つたもの、又同訳「ラムボオへ」は中原中也氏が写してもつてゐたものを兄の死後借用した。なお、目次・本文共に題名は「ランボオへ」である。

26 夢

1 草稿

《草稿番号》 40152

《用紙》「丸善特製 二」原稿用紙(25×24)

《筆記具》鉛筆

《校異》

夢(この後に出づ「べ↓可」きあるものゝ一部となるべき)

…：眼がさめたまゝで床の中に入つてゐる。下女が「どこから来た↓削除」手紙を持つて来て枕許に置いて行つた。「封筒の裏には墨で女名前が書いてある。↓差出人は女である。」知つてゐる女なのか知らない女なのかそれがはつきりしない。何だか「愛↓恋」してゐた女のような気がする。

「ナシ↓手紙は」長い巻紙に墨で「2字不明、消しゴムできれいに消してある」と↓丁寧」書いてあつた。それを「よ↓読」んで行くうちにあつちの海岸のカフェの女「が↓だ」と思つた。そして自分がその女を恋してゐたことを思ひ出した。「自分は↓實際は」そんな女を知つてはゐなかつたのだ。「ナシ↓」手紙には「自分↓彼女」が近頃ある男と結婚したこと、「ナシ↓やはりその辺の海岸に住むやうになつたこと」「承知して」↓削除(ゴムで消している)結婚後の「ナシ↓家庭の」「自分↓彼女」が非常に幸福であること「(書きかけ)↓彼女と夫が何でも↓削除」楽しい「有様が↓ことなどが」「詳しく

↓こまぐと」書いてあつた。自分はその中「(?)↓で」「私は今「大へん↓それは」それは幸福です」といふ文句だけをおぼえてゐる。けれどその文句がなく「と↓で」も、「手紙全体↓彼女が今」幸福の絶頂にゐるのだといふことは、「ナシ↓つゝまじやかではあるが」手紙全体にあふれてゐる、「つゝまじやかな↓削除」歓喜の情から充分に察することが出来た。「自分は何度も何度もこの手紙をよみ返して↓削除」「回想に耽つてみたい様な氣になつた」。もし↓ので、【起き【上つた↓で、】はなれの↓削除」自分は「その↓削除」あほのけになつたまゝその手紙を両手で顔の上にさゝへ「ながら、読みかへす【ともなく↓ことはせ】ずに↓で、」たゞ茫漠とした回想に耽つた…：氣がつくと枕許に母が坐つて、自分がさつき投げ出しておいた封筒をいじつてゐる。「ナシ↓すぐさま」自分は母がこの手紙をよみたがつてゐることを知つた。「ナシ↓そして」母が「これを其の女名前の手紙を自分への恋文だと思つてゐたこと↓削除」其の手紙の主「に↓を」自分が恋してゐると信じてゐること「が↓は」「明白↓削除」その夢の中の自分には少しも疑ふ余地のないことであつた。「然」↓しか「し自分は「其↓現在そ」の女「に↓を」恋してはゐない。自分はそのことを母に知つてもらひたいと思ふ。しかし母「は↓が」「は」も消していない」

《注》第2葉右欄外に25と12を掛ける筆算と、眼の戯画がある。

27 「ある日われ恐しき夢により」

1 草稿

《草稿番号》 40153

《用紙》「丸善特製 二」原稿用紙(25×24)

《筆記具》ペン黒インク(1・2行)、鉛筆(3行目以下)

《校異》

ある日われ恐しき夢により
いぎたなき眠よりさめ

「我↓わ」が下に灰色の海の

ほの白き波「がしらを↓のざわめくを」見た。

「ナシ↓また」わが「双の↓削除」脚のその海より立ち

わが腕かひなの

28 構図

1 草稿

《草稿番号》 40154

《用紙》「丸善特製 二」原稿用紙(25×24)

《筆記具》鉛筆

《校異》

□□□↓構図

涙の真珠にかざられて

涙の水蒸気につままれて

源氏の君が俺の方へ歩いてくる

一つの声がいふ

「あいつは「敵」↓貴」様の敵ぢやないか

打ち倒せ 息の根をとめろ」

俺はためらった

「ナシ↓そして眺めてゐた」

源氏の君は実際美しかったから

富永太郎生前未発表詩篇の生成過程(2)

源氏の君は俺のそばまで来て
につこり笑つてみせて

それからしづく歩み去つた

俺は「(?)↓し」まつたと思つた。

《注》題名「構図」は丸く囲んである。題名下部に「早くしあげろ」と書き込みがある。

29 「嘆いたとて―嘆いたとて」[抹消稿]

1 草稿

《草稿番号》 40155

《用紙》「丸善特製 二」原稿用紙(25×24)

《筆記具》鉛筆

《校異》

歎いたと「も↓て」―歎いたとて

もうく詮ないこと

歎くまいとはおもへども

「生れて恋をしたことが↓ほんに此の身のやるせなさ」

「恋しうて 涙なが↓生きるが【□□↓削除】辛うはな【ナシ↓い】

けれど【も↓削除】↓削除」

「春の夜の雨。↓削除」

「〔擬俗謡調〕↓削除」〔二二、三、九↓削除」

何となう煙る柳につまされて

泣きたいやうなひよんな気に

《注》全体を大きく×印を付けて抹消してある。

この詩句に続いて次の2行のメモが書かれている。
林檎を持てる女。

◎祖母の霊（散文詩）

30 「涙して万象の変改を悲願する夜の室内に」

1 草稿1

《草稿番号》 40156

《用紙》 無野洋紙

《筆記具》 鉛筆

《校異》

涙して万象の変改を悲願する夜の室内に

「かゝる↓涙して」万象の変改を悲願す

る「涙のひまひまに↓夜の室内に」

「かつま□□↓凝然と」わが視野「を統制↓に君臨」する静物の堆積
あり

椅子と円卓とそれを掩ふ数冊の古ぼけし書物「ら↓削除」と
煙草を収めし小匣（匣の誤記か）と長さパイプと

一塊の古瓶と萎れたる花束と

2 詩帖稿〔抹消稿〕

《草稿番号》 40191-31

《用紙》 詩帖I 61頁

《筆記具》 鉛筆、ペン（削除の×印にのみ使用）

《校異》

○
涙して万象の変改を悲願する夜の室内に

凝然とわが視野に君臨する静物の堆積あり
椅子と円卓とそれを掩ふ数冊の古ぼけし書物らと

《注》最後の2行を鉛筆で削除した後、全体をペンで×印を付けて削除している。

31 大脳は厨房である〔抹消稿〕

1 詩帖稿

《草稿番号》 40191-24, 25

《用紙》 詩帖I 47-49頁

《筆記具》 鉛筆

《校異》

大脳は厨房である

眼球は日光を厭ふ故に

瞼の鎧戸をひたとおろし

頭蓋の中へ引き退く。

大脳の小区画を填めるものは

困憊したさまさまの食品である。

青かびに被はれたパンの缺け、

切り口の饅えたソオセエジ……

オリウ油はまださらさらと透明らしいが

瓶一面の埃のために

よくは見えない。

眼球は醜い料理女である。
厨房の中はうす暗い。
彼女は床のまん中で
少しばかりの獣脂を焚く。
背の低い焰が立つて
油煙がそつと 頭蓋の天井に附く。

彼女は大脳の棚の下をそくさとゆきゝして
幾品かの食品をとりおろす。
さて 片隅の大鍋をとつて
もの倦げに黄いろな焰の上にかける……

彼女はこの退屈な文火^{とろび}の上で
誰のためにあやしげな煮込みをつくらうといふのか。

彼女は知らない。
けれども、それが彼女の退屈な
しかし唯一の仕事である。

大脳はうす暗い。
頭脳は燐^{くぶ}つてゐる。
彼女は――眼球は愚かなのである。

《注》 大きな×印で、頁毎に全篇抹消している。

Avril 1923.

32 画家の午後〔抹消稿〕

1 詩帖稿〔抹消稿〕

《草稿番号》 40191-26
《用紙》 詩帖 I 52頁
《筆記具》 鉛筆
《校異》

画家の午後

雲^マ解けの午後は淋し
砂利を囁む荷車の
轍^ねの音遠くきこえ
疲れ心地にふくみたる
パイプのけむりおのゝく
室ぬちは冬の日うれ
描きさしのセント・セバスチアンは
低くためいきす。
電燈のとぼるを待ちつ
われは今 わが心の洞^{うつろ}を眺む。

Fevrier 1924.

《注》 全体を大きな×印で抹消してある。

33 煙草の歌〔抹消稿〕

1 詩帖稿

《草稿番号》 40191-27

《用紙》 詩帖Ⅰ 53頁

《筆記具》 鉛筆

《校異》

○煙草の歌

阪を上りつめてみたら、
盆のやうな月と並んで、
黒い松の木の影一本……
私は、子供らが手をつないで歌ふ
「籠の鳥」の歌を歌はうと思った。
が、忘れてゐたので、
煙草の煙を月の面おもてに吐きかけた。
煙草は私の歌だ。

《注》 全体をいくつもの×印で抹消している。

※以下、詩帖中の断片稿、抹消稿。

34 「闇の中で瞼を閉ちてゐるのだが」

1 詩帖稿

《草稿番号》 40191-14

《用紙》 詩帖Ⅰ 27頁

《筆記具》 鉛筆

《校異》

Mars 1924.

○
闇の中で瞼を閉ちてゐるのだが、
「巻↓削除」煙草を吸へば、
「ほの赤い灯ひかりが眼まなこ【(?)↓の中】に射して来る。↓眼の中に ほの赤
い灯ひかりがさして来る。」

35 「めくるめき狂騒する大脳の渦心近く」〔抹消稿〕

1 詩帖稿〔抹消稿〕

《草稿番号》 40191-29

《用紙》 詩帖Ⅰ 27頁

《筆記具》 鉛筆

《校異》

めくるめき狂騒する大脳の渦心近く
しめやかに「青き支那絹を裁つ女↓おんみは坐し」
て青き支那絹を裁ち給へり

《注》 全体を抹消してある。

36 「机の上を飛びまはる」〔抹消稿〕

1 詩帖稿〔抹消稿〕

《草稿番号》 40191-38

《用紙》 詩帖Ⅰ 78頁

《筆記具》 鉛筆

《校異》

机の上を飛びまはる

夥しい ゴールデンバットの夫婦もの、

人の心を吸ひ取るやうな、

こよなく美しい深緑の空

に浮び、しかも

かれらは鳴きまはす――

【鳴きまはす↓削除】

プッシュ、プッシュ、プッシュ、

tres [eco]

《注》 全体を抹消してある。

37 「鈍感を自覚する神経を」〔抹消稿〕

《草稿番号》 40191-39

《用紙》 詩帖Ⅰ 80頁

《筆記具》 鉛筆

《校異》

○

鈍感を自覚する神経を駆り立て、張りつめて、

薄暮の大空へ硬性の金属音を一つ

弾き上げた。

《注》 全体を抹消してある。

38 「山の手の春の夕は」

1 詩帖稿1〔抹消稿〕

《草稿番号》 40191-42

《用紙》 詩帖Ⅰ 85頁

《筆記具》 鉛筆

《校異》

○

【「山の手の↓裏街の」春の夕はしほしほとためらつて↓削除】

「裏町の春の夕は しほしほとためらつて↓削除」

2 詩帖稿2

《草稿番号》 40191-43

《用紙》 詩帖Ⅰ 87頁

《筆記具》 鉛筆

《校異》

○

「裏街↓山の手」の春の夕はしほしほとためら「ナシ↓つ」て

煤色「の羽目板に挟まれた↓ににじんだひおほひの」小路小路に

哀訴してしとやかに夜を防ぐ。

39 「蠟燭を吹き消して寝返りを打てば」

1 詩帖稿

《草稿番号》 40192-18

《用紙》 詩帖Ⅱ 32頁

《筆記具》 鉛筆

《校異》

蠟燭を吹き消して寝返りを打てば、ああ、海の旗、陸の旗。
―人間は悩まないやうに造られてある。

40 「関節は悲しい！」

1 詩帖稿

《草稿番号》 40192-18

《用紙》 詩帖Ⅱ 32頁

《筆記具》 鉛筆

《校異》

関節は悲しい！

ひらいた室の

赤児のねぐざり

〔付記〕 本稿は、科学研究費補助金（基盤研究（C） 課題番号 23520238 「富永太郎直筆原稿の画像データベース化による文学テキストの生成研究」）の助成を受けたものである。